

メッセージアウトライン サムエル記第一14:1～52

「サウルの迷走」

<13章の要約>

イスラエルの王となったサウルの率いるイスラエル軍は最初は三千人の兵がいたが、強力なペリシテ軍を恐れて敵前逃亡をし、ある者は洞穴や地下室などに隠れ、あるいは敵側につき、最終的には約六百人しか残っていなかった。ペリシテ人の兵力はこの時、戦車三万、騎兵六千、それに海辺の砂のように数多くの兵たちであった。サウルはギルガルで預言者サムエルの指示を仰ごうと彼が来るのを待っていたが、彼の来るのが遅れ、そのため本来はサムエルがささげるべき全焼のいけにえを自らささげてしまった。その直後にサムエルが到着した。サウルは自らがささげたことを弁解したが、サムエルはこのことによって彼の王国は立たず、主はみこころにかなう別の人を任命すると告げられた。

ペリシテ人の略奪隊はミクマスから南下してゲバに向かっていた。

「ギルガル」…ヨルダン川の西数キロメートルの地。かつて指導者ヨシユア率いるイスラエル人が東からヨルダン川を渡って最初に宿営した記念すべき地。ここに聖所が設けられており、サムエルが定期的に巡回して、いけにえを主にささげることになっていた。

「ミクマス」…エルサレムの北約15キロメートルの地。「ゲバ」…エルサレムの北約10キロメートルの地。

[14:1-15] そのような緊張に満ちたある日、サウルの息子ヨナタンと道具持ちはペリシテ人の先陣に向かい、先制攻撃をしようとした。彼は父サウルにはそのことを知らせなかった。止められると思ったのであろう。この時サウルとともにいた祭司アヒヤは幼い頃のサムエルが仕えたあの祭司エリのひ孫にあたる人物であった。エリ→ピネハス→アヒブ(イ・カボデ[4:21]の兄弟)→アヒヤ 彼は祭服であるエポデを身につけていた。ヨナタンが向かった先は谷によって隔てられており、手前側にも向こう側にも切り立った岩があった。この岸壁を下り、また向かい側の岸壁を上らなければ敵陣に着けない。「ボツェツ(白く輝いている)、センネ(いばら)の意」岩に名前が付けられていたということは当時有名な岩であったのであろう。片側の岩はミクマスに面して北側、他方はゲバに面して南側にあった。

「ヨナタンは道具持ちの若者に言った。『さあ、この無割礼の者どもの先陣のところへ渡って行こう。おそらく、主がわれわれに味方してくださるだろう。多くの人によっても、少しの人によっても、主がお救いになるのを妨げるものは何もない。』道具持ちは言った。『何でも、お心のままになさってください。さあ、お進みください。私

も一緒に参ります。お心のままに。』(6~7)

「無割礼の者」…ペリシテ人のこと。イスラエル人の男子はみな神の契約の民のしるしとして割礼を受けていた。→創世記17:9~14 「おそらく」…ヨナタンはまだ確信はないが、かつて主なる神が少数のイスラエル軍によって敵を打ち破らせてくださったことを知っており、この時も主が助け、勝利を与えてくださると信じていたのであろう。→士師記7章 道具持ちの若者もヨナタンの気をくじくことなく、「…さあ、お進みください。私も一緒に参ります…」と従った。このような助け手を持つ者は幸いである。

「ヨナタンは言った。『さあ、あの者どものところに渡って行って、われわれの姿を現すのだ。もし彼らが【おれたちがおまえらのところに行くまで、じっとしている】と言ったら、その場に立ちとどまり、彼らのところに上って行かないでいよう。しかし、もし彼らが【おれたちのところの上って来い】と言ったら、上って行こう。主が彼らを、われわれの手に渡されたのだから、これが、われわれへのしるしだ」(8~10)

ヨナタンはペリシテ人が自分たちのところに下って来るほど勇敢か、それとも現在地にとどまって、いざとなれば背後にいる味方の軍を頼みとするような臆病な者たちかによって判断しようとした。

ペリシテ人は自分たちのところに上って来いと言い、それを神からのしるしとして、ヨナタンと道具持ちはペリシテ人側の岩壁を上り、彼らの前に身を現した。そして戦いとなり、何とペリシテ人たちは彼らと戦って打ち殺されたのである。最初に倒されたのは約二十人であった。その場所の広さは一ツェメドのおおよそ半分ほどの広さであった。(一ツェメドはくびきの牛が一日かかって耕す面積=1エーカー[acre]約4千㎡)それで二分の一ツェメドは約2千㎡となる。≒600坪

このことが発端となって、ペリシテ人の陣営全体に非常な恐れが起こった。(11~15)

「地は震え」(15)とあるが、これは主なる神の働きによるものであろう。同様な出来事は→7:10

[16-23] サウルのために見張りをしていた者たちが見ると、ペリシテ人の大群は震えおののいて右往左往していた。(16) だれが自分たちのうちから出て行ったかを調べると、ヨナタンと道具持ちがいなかったことが分かった。(17) サウルは祭司アヒヤに命じてエポデでそのことを確かめようとした。(18) 「神の箱」とは神意をうかがうウリムとトンミムという石が入っていた箱でそれは祭司のエポデにつけられていた。サウルが祭司アヒヤとまだ話している間に、ペリシテ人の陣営の騒動はますます大きくなり、それでサウルは「手を戻しなさい」と祭司に言い、神意をうかがうことを中止させる。(19)

しかし、これは中途半端ではなはだ勝手なことである。

「サウルと、彼とともにいた兵が集まって戦場に行くと、そこでは剣をもって同士討

ちをしていて、非常に大きな混乱が起こっていた」(20) これはイスラエル軍の大勝の第一原因である。

「それまでペリシテ人について、彼らと一緒に陣営に上って来ていたヘブル人も転じて、サウルとヨナタンとともにイスラエル人の側につくようになった」(21) 大勝の第二原因。

「ヘブル人」…ペリシテ人側についていたイスラエル人のこと。

「また、エフライムの山地に隠れていたすべてのイスラエル人も、ペリシテ人が逃げたと聞いて、戦いに加わってペリシテ人に追い迫った」(22) 大勝の第三原因。

「その日、主はイスラエルを救われた。そして、戦いはベテ・アベンに移った」(23)

「ベテ・アベン」…ベテルの東の地 ペリシテ人は後退した。これは主が与えてくださった勝利であった。

[24-46] 「さて、その日。イスラエル人はひどく苦しんでいた。サウルは、『夕方、私が敵に復讐するまで、食物を食べる者はのろわれよ』と言って。兵たちに誓わせていた。それで兵たちはだれも食物を口にしていなかったのであった」(24)

サウルはペリシテ人追撃が遅れることを嫌ったのと敵から奪ったものを神にささげることがを第一として、イスラエル人に食事をさせなかった。食事をしていれば力がついて、もっと敵を追えたであろうに。

現地の森には蜜があったが、だれもそれを食べなかった。(25~26)

しかし、ヨナタンは父サウルの誓いを知らず、蜂蜜を食べた。(27) 「目が輝いた」とは元気が出たということであろう。

それを見た兵の一人がサウルが兵に誓わせたことの次第をヨナタンに話したが、彼は「父はこの国を悩ませている…」と言った。(28~29)

「もしも今日、兵たちが、自分たちが見つけた敵からの分捕り物を十分食べていたなら、今ごろは、もっと多くのペリシテ人を討ち取っていただろうに」(30) この考えの方が正しい。

「その日彼らは、ミクマスからアヤロンに至るまでペリシテ人を討った。それで兵たちはたいへん疲れていた」(31) 「アヤロン」…ミクマスの南西約30キロメートルのところ。 食事もしないで広範囲にわたる戦いをして彼らは非常に疲れていた。

「兵たちは分捕り物に飛びかかり、羊、牛、若い牛を取り、その場で屠った。兵たちは血が付いたままで、それを食べた」(32) ヨナタンのことばを聞いて兵たちは分捕り物の動物を屠り、血が付いたままで食べた。これは律法では禁じられていたことである。→申命記12:23~25他

サウルに「兵たちが血のままで食べて、主に罪を犯しています」と告げる者があり、それを聞いたサウルは、彼らは自分を裏切ったと怒り、大きな石を転がして来るようにと言う。これは主のための祭壇を築くためのものであった。そしてそこで分捕り物ではなく、自分の牛か羊を連れて来て血がついていないようにして食べるように命

じる。(33~34)

「サウルは主のために祭壇を築いた。これは、彼が主のために築いた最初の祭壇であった」(35)

イスラエルの先祖アブラハムもイサクもヤコブも主なる神を第一にして祭壇を築いたが、サウルは今に至るまで祭壇を築いたことはなかった。

サウルはさらに夜もペリシテ人を追撃することを主張するが、祭司アヒヤは神のみこころをうかがうことを勧めた。(36) サウルは神にうかがった。これは祭司のエポデにあるウリムとトンミムによってであっただろう。しかし、その日、神からの答えはなかった。(37)

「サウルは言った。『民のかしらたちはみな、ここに近寄りなさい。今日、どうしてこの罪が起こったのかを確かめて見なさい。まことに、イスラエルを救う主は生きておられる。たとえ、それが私の息子ヨナタンであっても、必ず死ななければならない。』しかし、民のうちだれも彼に答える者はいなかった」(38~39)

ヨナタンが先頭になってペリシテ人に向かって行ったため今回の勝利がもたらされた。もちろんそれは主なる神の助けがあつてのことであるが。それなのに兵に食物を食べることを禁じたサウルこそ外的な命令を出していたと言わざるを得ない。それゆえ兵たちはヨナタンが食物をとるように勧めたことを知っていたが、皆、沈黙していたのである。

それでサウルは自分と息子ヨナタンとが一方の側に、他の兵士たちは他方の側に分けて、主のみこころをうかがった。するとヨナタンとサウルが取り分けられ、他の者たちは外れた。さらに今度は「私か、息子ヨナタンかを決めてください」とうかがったところ、ヨナタンが取り分けられた。(40~42)

サウルはヨナタンが何をしたかを問い詰め、ヨナタンは必ず死ななければならないと宣告した。(43~44)

しかし、この時、民はサウルに言った。「この大勝利をイスラエルにもたらしたヨナタンが死ななければならないのですか。絶対にそんなことはあり得ません。主は生きておられます。あの方の髪の毛一本でも地に落ちてはなりません。今日、あの方は神とともにこれをなされたのです。」(45)

このように民はヨナタンを弁護したのでサウルはそれ以上何もできず、ヨナタンは助かった。

「サウルはペリシテ人を追うのをやめて引き揚げ、ペリシテ人は自分たちのところへ帰って行った」(46)

47~52節はサウルの家系の説明と、その後のサウル王によるイスラエル王国の展開である。

本日の個所からサウルの迷走ぶりがよくわかる。

①サウルはエポデにより誰が自分たちの中から出て行ったかを知ろうとしたが、中途半端でやめた。(18~19)

②愚かな誓いを立てて、食物を断つことを命じた。(24)

③その誓いが破られると、今度は次善の策として自分たちの家畜を石の上で屠って食べよと言う。(34) 命令が頻繁に変わる。

④にわか作りの祭壇を設ける。しかも、これが初めて彼が築いた祭壇であった。(35)

⑤神のみこころを知ることができないと、今度は別の方法で誰が罪を犯したかを知ろうとし、選ばれたヨナタンに死を命じる。(38~44) しかし、サウルこそこの罪の原因であると知るべきであった。

⑥民にそのことを反対されると、それをくつがえす。

このようにサウルはイスラエルの王としてふさわしくない迷走ぶりを示す。

11:13節で「今日はだれも殺されてはならない。今日、主がイスラエルにおいて勝利をもたらしてくださったのだから」と謙遜に語ったサウルの姿はもうここには見られない。

私たちはこのイスラエルの王として立てられているサウルの迷走ぶりから教訓を学ばなければならない。主なる神は常にご自身の民であるイスラエルと共におられる。信仰をもって従い、行動して行くときに、主は必ず道を開いてくださる。それが人生における困難であれ、苦しみであれ、主が共にいてくださるならば、そこに道があり、勝利がある。

しかし、常に主により頼むことをせず、中途半端な信仰で自分の判断や知恵を優先していくならば、みこころにかなわない道に進み、迷走してしまうかもしれない。

私たちは、心を尽くして主により頼む信仰の歩みをしていくことが大切である。→箴言3:5~6